

「自主自律」とは

「自主自律」二高に入ってから、これまでで一番聞いている言葉かも知れない。いや、入学前、去年の夏のオープンスクールの時からだったか。それまでの私は、二高に「ガリ勉」というイメージしか持っていなかった。現在、その二高で勉強だけではない非常に充実した生活を送れているのは、オープンスクールで目にした この言葉が、自分の二高という学校に対する認識を変えてくれおかげでもある。

「自主自律」とは、何だろうか。今回の東京研修を例に出すなら、集合時間に遅れず着く、翌日に備えて早く寝る、などであろうか。確かにそれもいわゆる「自主自律」ではある。しかし、百有余年の歴史と伝統の中で培われてきたこの言葉の重みは、そんなものではないとも思う。では何なのか。それは「自分の将来を自分で決められる」ことであると、私は今回の東京研修で痛感させられた。

ここまで書いてきて、ふと思ったことがある。「自分の将来を自分で決められる」この意味での「じりつ」は自「律」ではなく自「立」ではないか？ということである。どうしても気になったので、この 2 つの言葉の意味について調べてみた。

「自立」＝他からの従属から離れて独り立ちすること。他からの支配や援助を受けずに存在すること。

「自律」＝他からの支配や制約などを受けずに自分自身で立てた規範に従って行動すること。

つまり、「自立」は他に頼らず存在すること、「自律」は自ら行動すること。どちらが二高生のあるべき姿であるかは明白だ。他に頼らずに生活できても、何も目標を持たずにただ生きていたのでは何の意味もない。主体的に、自ら積極的に生きる。これが今の自分にとって、最も重要なことなのだ。

さて、時は 5 月頃まで遡る。東京研修の参加についてのプリントが配布され、参加するかどうか迷っていた私の背中を押してくれたのは、父と母だった。今振り返ると、この時の自分はやはりまだ完全な「自主自律」が出来ておらず、親に勧められてやるが多かったように思う。とは言っても今の自分がどれだけ変われているかは未知数だ。次、このような行事があったときの自分の行動はどのようなのだろう。過去、現在、未来の自分。成長し続けられていると信じたい。

そんな訳で東京研修への参加が決まり、ミーティングの日程も全て自己管理で、班長になったため訪問先の企業のアポ取りもした。事前準備だけでもやはり「自主自律」の力がある上、その力を伸ばしてくれるのが東京研修という行事だとつくづく思う。そんなこんなで、あつという間に8月8日がやってきた。最初に迎えたディレクトフォースを、1人ずつ、印象に残った言葉を挙げながら振り返っていきたい。

①近藤玄大さん

「障害は、その人にあるのではなく、周りの環境によって生じる。」

彼は左利きだ。幼い頃からハサミや改札などを使う度、なぜ世界は右利き基準で作られているのだろう？と思ったという。確かにそうだ。彼が作っている義手に関しても、「なぜ世界は両手がある人基準で作られているのか？」という疑問が生まれる。両手がある人の方が、ない人より多いから、といった安易な話ではないのである。彼は留学経験もあるそうだが、その影響もあると思われる彼の広い視野と柔軟な考え方に、私は研修1日目にしてカルチャーショック(?)を受けてしまった。その他にも、「障害というマイナスをプラスに」など、彼の考え方にはなるほどと思うところが多く、「多くの人と関わり、異なる意見の人と話す」ことの大切さを感じることのできる講話であった。

②青木匠さん

「高校生の自分が住んでいる今の世界は、とてつもなく狭い。」

これはディスカッションが始まって一番最初に言われた言葉で、なぜだか印象に残っている。私は現在の仙台を中心とした自分の「世界」を広いとは思っていないし、言ってしまえばこの言葉の意味するところはもう知っている訳である。だが、この一言が青木さんとの非常に内容の濃いディスカッションを凝縮した、非常に重みのある言葉となっているのだから不思議である。「世の中に出るということは、大海原への航海と同じ。時には難破、遭難もするが、過酷な航海を乗り越えて初めて美しい景色を見ることが出来る。」という様な分かりやすい表現、また、事前に提出した私たちの質問に対し、予め回答を送って下さって議論を深めようとする誠実な姿勢。話の内容はもちろんだが、一介の高校生でしかない私たちにさえ、真摯に向き合ってくれた彼の人間性にも、学ぶべきところは多い。

更に最も印象的だったのが、私の「ICTを始めとした科学技術の発達の中で、私たちは何を最終的な目標として生きていけばいいのか。」という質問に対する答えだ。私が質問を言い終わると、彼はノータイムで「それは自分で考えなきゃダメだよ」と言った。色々な経験を積む中で、自分自身で考える。時間がかかってもいい。そして、その最終的な目標がないと、生きている意味はない。彼の口から次々と、しかしどっしりと発される言葉を聞きながら、心にグッとくるものがあつたのを覚えている。

③樋口恵佳さん

「弁護士は今ある法律を用いることしかできない。だから研究者になろうと思った。」

これも相当強烈な一言。東北大法学部で学ぶうちに、このような考えが生まれたという。聞けばなるほどと思うが、弁護士＝エリートというイメージしかなかった自分にとっては全く新しい視点で、非常に驚いた。東北大法学部に入って良かったことは？という質問に対しても、「自分の夢が変わった」との回答で、私自身大学選びの重要性を再認識させられた。また、進路がまだ全く定まっていない自分にとって、「大学で進路を決めたり、変えたりすることもある」という事実は勇気をもらえるものであった。青木さんの言葉を借りれば、高校生時代は航海に出るための準備期間だから、今の内に多くの経験をし、それから自分の生き方を模索すべきだ、ということになる。ただ、もちろん自らの進路が決まっていなくて不都合な点も多々ある。1年前にも皆、「高校への志願理由書には卒業後の進路も明記するように」と言われたであろう。更に、同じグループのメンバーの中には「公認会計士になるため、東北大の経済学部に行く」というレベルまで決まっている仲間もいた。正直、焦りが無い訳では無い。しかし、青木さんと樋口さんの共通点として「職業を超えて、人生そのものの目標がある」ということが挙げられると、私は思う。私の人生そのものの目標は何なのか？今後も、それを探しながら高校生活、さらにその先の道も歩んでいきたい。

④水口泰介さん

「(国際間に) 違いがあるということを認識することが重要だ。」

これも、ある意味新しい視点と言えるかもしれない。なぜか？彼は、「言葉も文化も違う国同士の対立を解決するためには、〇〇や××が必要だ。」と言っているのではない。違いが「存在している」ことを「認識する」こと。これが重要と言っているのだ。そして、彼の話の聞けば聞くほど、今までの自分の認識がどれだけ甘かったか分かってくるのだ。

ディスカッションの主題は世界の食料危機について。現在の世界の人口73億人の内、飢餓に苦しんでいるのは7億9000万人、約9分の1である。また、そのような人々に対する国連による食料支援は年間約320万tだ。一方、先進国で1年間に廃棄される食料は、なんと約600万tにも及ぶという。皆さんはこの違いを「認識」していただろうか？私は国連による支援が320万tと聞いたとき、先進国における廃棄量も、せいぜい同じくらいだろうと思った。国際間の格差は、私たちが思っている以上に広がっている。このことを伝えるため、彼はあえて「違いがあることを認識するべき」と言ったのだろうと思う。もうひとつ印象に残っている彼の言葉に「これからは、国際格差をなくす仕事が必要になってくる」というのがある。資本主義も社会主義もそこまで上手くいっていない現状をどう解決するか。国際的な面から現代の世界の課題について討論することで、更に視野の広がるディスカッションとなった。

以上がディレクトフォースの内容である。当然、4人とも視点や考え方は異なる上に、価値観にも相違点がある。しかし、「違いがある」ということを言い換えると、「話に一貫性があり、自らの考えをしっかりと持っている」ということだと思える。一貫性がなく、常に周りに流されて生きていれば、周りとの違いなど生じない。自らの生き方、目標をしっかりと定めることで初めて、周りとは異なり、異なる周りと尊重し合える「個人」になることができる。それによって「自主自律」も自然に達成できる。今回のディレクトフォースは、今後も様々な、かつ自分と異なった人と話し、討論し、価値観や考え方を共有し合って成長し続けたいと思わせる、非常に貴重な経験となった。この度の東京研修でお世話になった全ての人に心から感謝して、この文章の結びとしたい。